

避難の母子 継続支援

東京電力福島第一原発の事故で、福島県外へ避難した母子を継続的に支援する取り組みが、避難先で広がっている。避難生活の長期化で、子育ての悩みや将来への不安を抱える母親たちが孤立しないよう、定期的に集まる場が相次いで設けられている。

27日、東京・築地の築地本願寺の一室で、軽やかなミシンの音が鳴り響いた。福島県から都内に避難している母親と子どもたちが、コップを入れるきんちゃく袋を縫っていた。福島県南相馬市から避難した子どもたちのいる、同県内の保育園に送り、4月から小学校に通う卒園児にプレゼントする予定だ。

この活動を企画したのは、都内の主婦グループ「ちくちくサポーターズ」。東

日本大震災の直後から体操服入れや弁当箱入れなどを

作り、被災地の子どもに贈ってきた。2月からは同寺



被災地に送るきんちゃく袋を作る広田一枝さん(右)ら(27日、東京・築地本願寺で)＝本間光太郎撮影

の協力を得て、5人前後の避難者を招き、週1回ほど、ネックウォーマーやニット帽作りを楽しんでいる。グループ代表の川上美帆さん(43)は「長く続く避難生活では、継続的な支援が必要。

交流拠点設け 孤立防ぐ

親子で少しでも楽しく過ごす手伝いができれば」と話す。

南相馬市から都内へ避難した広田一枝さん(45)は「家にもついていると、不安で押しつぶされそうになる。やってみようばかりでなく、被災地のために何かできることが救いになる」と、手を動かしていた。

福島県によると、県外への避難者数(3月19日発表)は、約6万2800人。避難先で最も多いのは山形県で約1万3000人。次いで東京都が約7600人、新潟県約6700人、埼玉

約4600人。山形市では3月初め、子

育て支援のNPO法人「やまがた育児サークルランド」が、福島からの母子向けの子育て広場を開設した。民間の戸建て住宅を借りてスタッフを常駐させ、お茶を飲みながら母親同士

を開く。避難生活を送る母親たち自身による取り組みもある。「福島避難母子の会」(関東)は3月上旬、東京都品川区に「コミュニティスペース」を開設した。支援者がマンションの一室を無償提供。都内や横浜市内などで生活する母親の交流会を開いている。

で話ができる環境を整えた。4月上旬から週2回程度利用できるようにし、予約制で臨床心理士による相談事業も行う。

代表の野口比呂美さんは、「避難が長期化しており、母子で孤立してしまうことが心配。常設の場所を設け、気軽に立ち寄れるようにしたい」と話す。

東京都内で子どもの学習支援を行ってきた民間グループ「きらきら星ネット」も、4月から週1回程度、東京都千代田区で「サロン」

子育て支援に詳しい武蔵大学教授の武田信子さんは、「年度が変わるこの時期、居住地を変える人もおり、支援の情報をくまなく届けるのは難しいが、今も避難生活を送る人がいることを忘れないようにしたい。避難者支援の継続とともに、通常の子育て支援を充実させることが、困っても声をあげられずにいる避難者親子の支援にもつながる」と話している。